

「トピックス」 令和 7（2025）年度

第8回 「令和の日本型学校教育②」

「令和の日本型学校教育」の2回目です。前回はこの教育の全体像をお示しましたが、今回は「『自立的な学習者』を育てる学習環境」についてお伝えしたいと思います。

*中央教育審議会教育課程部会では、「令和の日本型学校教育」に求められる「『*自立的な学習者』を育てる学習環境」として、「教育方法の*パラダイムシフト」と「環境を通して行う教育の重要性」が論じられています。

<注>

*中央教育審議会教育課程部会：学習指導要領改訂に関する審議や答申を行う文部科学省設置の専門部会。委員は学識経験者で構成され、審議結果は教育政策に反映される。

*自立的な学習者：自ら学習目標を設定し、計画・実行・振り返り・自己評価を主体的に行い、方法を選択・調整し、モチベーションを高めながら学習を深めることができる学習者。

*パラダイムシフト：ある時代や領域において支配的だった考え方や枠組みが技術革新や社会変動で根本的に転換し、思考や行動様式を刷新する現象。

まず、「令和の日本型学校教育」には、「多様性の包摂」と「自立的な学習者の育成」に向けた「教育方法のパラダイムシフト」が求められます。ブランソン（Robert K. Branson, アメリカ, 1932～2021）は、1990年の時点で、教師が正答を教える「口頭継承パラダイム」から双方向対話を重視する「現在のパラダイム」へ移行が完了していると言っています。しかし、「現在のパラダイム」でもなお、多くの場合、学習者（児童・生徒）は教師を介してのみ、学習の対象である経験や知識に出会うよう制限されています。未来の「情報技術パラダイム」では、学習者がクラウドやAIに自由にアクセスし、自立的に学習を進め、教師は学びのコーディネーター・ファシリテーターへと役割

を変えます。ギガスクール構想で整備した端末と高速ネットワークにより、デジタル学習基盤を土台に、教育理念の転換が現実のものとなり、学びの主体が教師中心から学習者中心へと移り、個別最適化された教育が可能になるのです。

次に、「令和の日本型学校教育」では、「手はお膝・お口チャック」など「抑圧的な規律訓練型教育」からの決別が必要であり、学習環境全体を自由に活用させることが重要です。例えば、道具や教材を学習者のタイミングで使える環境を整備すれば、授業中だけでなく休み時間にも主体的に学びが深まります。大切なのは、それぞれの学習者が心を動かされる教材と出会うことであり、教師は多様な情報や物品を用意し、うまく学べない学習者には個別指導も行いますが、主な役割は学びの環境を改善することなのです。

つまり、「多様性の包摂」と「自立的な学習者の育成」を目指す「令和の日本型学校教育」を実現するには、「抑圧的な規律訓練型教育」と決別し、「環境を通して行う教育」を推移することが大切であるということです。

安芸太田町教育委員会は、「令和の日本型学校教育」を具現化するため、私たちの町の強みである「自然」「文化」「人財」を活かしながら、『自立的な学習者』を育てる学習環境の整備に努めます。皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。